

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
1 「勉学を第一義とすること」を踏まえ、質の高い学力を育成する。 ・知的好奇心旺盛な生徒に、本質に触れる質の高い授業を提供する。また、生徒1人1台端末を効果的に活用しGIGAスクール構想を展開するなどして、生徒の主体性を高め、学びに対して自走する力を育成することで、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。	① 授業において「本質に触れる指導」「生徒の主体性や対話力を向上させる指導」を目指す。そのために、「本質に触れる指導」や「学習における生徒の自走」をテーマとした研究授業を、各教科や少人数のグループ単位で行い、授業改善に取り組む。	「授業が充実している」「興味関心が持てた」の2つの質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて加えた全体平均値 α 、 β をそれぞれ算出する。 ① 「よくあてはまる」 ② 「ややあてはまる」 ③ 「あまりあてはまらない」 ④ 「全くあてはまらない」 α 、 β の値が、 A ともに3.60以上 B ともに3.50以上 C 一方のみが3.50以上 D 一方のみが3.40以上	【判定】C 3.70、3.43	・12月に実施した授業評価で、「授業が充実している」「興味関心が持てた」の質問に対する全体平均値がそれぞれ3.70、3.43であり、判定はCだった。しかし、昨年同時期3.68、3.40、一昨年同時期3.64、3.35と比べて上昇しており、今年度の7月実施授業評価からも全体で0.01、0.03ポイント上昇している。 ・「生徒の自走」をテーマに全教員のグループ研究を実施し、教員間で共有した。今後も「本質に触れる授業」の実践を進め「充実度」や「興味関心」の上昇につなげていく。 ・生徒が主体的・能動的に参加する授業をととして「生徒の自走」の手法の研究、共有を図っていく。
	② 生徒に、模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学部説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、共通テストに向け、習熟度別授業の実施や校内模試問題の研究により深い思考力の育成を進める。	東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満	【判定】A 合計 46人	・東京大学13人、京都大学21人、国公立大学医学科12人、合計46人であった。京都大学21人は歴代最多である。また、大阪大学42人も難関大学合格143人も過去最多である。多くの生徒が高い志望を持ち続け、生徒と教職員が最後まで粘り切った結果である。 ・1年次の指導をはじめとした3年間を見通した指導が重要であることから、次年度以降も、生徒には進路講演会や東大見学会、進学説明会、学年団には志望校検討会を通じて高い志望をもたせる指導のバックアップをしたい。また、今後も自分の志望を貫く強い心を醸成していく。
	③ ホーム担任を中心に、年間6回以上の個別面接指導を実施し、文理選択を含め自身の進路について考えさせる。また、学習時間調査の結果も踏まえた指導により、家庭学習の定着を図る。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	【判定】A 95.9%	・一人ひとりの生徒の学習状況や生活状況に応じて面談を重ねた。面談では、学習面のアドバイスをを行うとともに、生徒の個々の悩みに耳を傾けることを重視した。 ・学年集会では、高校生活を前向きで有意義なものにできるよう、生徒の自己肯定感を高める話をする心を心がけた。 ・学習面や生活面でつまずきを感じている生徒を学年全体で見守り、支援していくことを大切にしてきた。
	④ ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、自分を見つめさせ、高い進路志望の確立を図る。また、集会や希望者補習なども通して、自発的な学習を促す。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	【判定】A 95.2%	・各生徒に応じた面談を、進路設計や学習に関するアドバイスに加え、精神面のケアなど年間約5回実施した。 ・「先生方の指導は、学力や学習意欲の向上に効果的である」という問いに対し、ほぼすべての生徒が肯定的に回答しており、授業に対する信頼が生徒との関係を築く上で重要な要素であると実感している。
	⑤ 授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削指導等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせて、「個に応じた指導」も展開していく。	難関10大学及び国公立大学医学部医学科の合格者の合計人数(重複可)が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満	【判定】A 難関大合格者 143名 医学部医学科 12名	・個々の志望や学力に応じて、担任だけでなく、学年・教科・進路指導課が連携しながら指導を行った。必要な情報は学年全体で共有し、有益な情報は生徒に積極的に還元した。 ・生徒が安心して学校を学習の拠点とできるよう、共通テストの指導も丁寧に行った。放課後には教室などで学習し、仲間と切磋琢磨する中で、高い志望に挑戦する生徒も多かった。 ・個人面談を効果的に実施し、学習のモチベーション向上や精神的なサポートに努めた。放課後補習や個別添削を行うなど、志望校に向けしっかり支援した。
学校関係者評価委員会の評価		・判定基準については今の学校の現状を踏まえて設定してみてもどうか。 ・今後も生徒の進路実現に尽力願う。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		授業評価の数値目標は今後も生徒の現状を掴みながら研究していく。今後も魅力ある授業を目指すとともに生徒の進路実現に当たっていく。		

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
2 探究活動プログラムの進化・発展及び成果の普及に努める。 ・これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させ、2つのプログラムを融合させた新しい探究活動プログラムを全校生徒に対して実践する。加えて、その指導法を本県高等学校に波及させるとともに、あまねく県民の方に発信する。	① これまで取り組んできた科学的な課題研究活動を進化・発展させることで、生徒の多面的・多角的なもの、見方、思考する力、行動する力など探究する力の向上を図る。また、普通科普通コースの課題研究では、SGH推進室と連携し、文理を融合させた新しい探究プログラムを確立し、その実践を図る。	学校評価Hアンケートにおいて、「自分自身の探究する力、思考する力、行動する力」「思考力・分析力や表現力」が高まったか。の設問に対して、「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合の平均が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	理数科： 【判定】A 1年：92.5% 2年：93.1% 3年：96.4% 普通科 普通コース： 【判定】B 2年：83.1% 3年：88.6%	・理数科では、3年間を通じた探究プログラムが確立していることから、年次ごとの集計結果が上昇している。今後は、次世代社会を見据えたプログラムへと、持続的な改善を進めていきたい。 ・普通科では、令和5年度より探究プログラムを大幅に改定した。今後も3年間を見通した探究プログラムを追進していく。
	② 課題研究を軸とした探究型学習プログラムの改善を図り、より「文理融合」を強化したカリキュラム開発を行う。また、グローバルリーダーに必要な種々の能力の育成を目標とし、その達成のために事業を展開する。	『SG探究基礎』（1年）『課題探究Ⅰ』『SG探究Ⅱ』（2年）『課題探究Ⅱ』『SG探究活用』（3年）において、グローバルリーダーに必要な思考力、協働力、表現力を身につけているかという項目で、「よくあてはまる」「ややあてはまる」とする生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】A 全体 90.4% 1年普通科 90.2% 2年SGコース 92.5% 3年SGおよび普通コース 88.6%	・1年生では、2学期に「企業連携プログラム」を新たに実施し、外部人材との探究交流を通じて、次年度に向けた経験を積んだ。 ・2年生では、多様な外部講師との対話や、学校内外での発表会における他校の生徒とのディスカッションを通じて、生徒の問題意識を醸成するとともに、問題を自分事として捉え表現する力を養った。 ・3年生では、2年次までの成果を踏まえ、英語での発表や英文でのまとめに取り組んだ。また、下級生に助言する場面を設けることで、学びの成果が次の学年へと波及するようにした。
学校関係者評価委員会の評価		・地域住人と泉丘高校の生徒との交流など、外の世界で行動する姿勢はとてもよい。 ・人間力を今後もしっかりつけていってほしい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		・今後も総合的な探究の時間をとおして、自然科学的な課題や地域の課題をはじめ様々な分野において探究する場を提供していく。 ・様々な機会をとおして挨拶をはじめ他者をおもんばかる姿勢を育てていく。		
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高めるとともに、リーダーシップを発揮し、グローバル人材としての資質を育成する。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】B 89%	・今年度の「生き方講演会」では、嘉悦大学 教授 高橋洋一氏をお招きし、「世界の『今』を読み解く」という演題でご講演いただいた。統計や歴史的背景などの視点を交え、生徒の興味を引きつける内容であった。 ・その他の講演も、生徒にとって適切な時期にふさわしい内容で実施した。来年度も、生徒のニーズを十分に考慮し、講師や講演内容を慎重に検討していきたい。
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、以下の挨拶指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・職員室等の入室マナー ・授業の開始、終了の挨拶	「私は、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	【判定】B 89.2%	・昨年比1ポイント増であった。 ・生徒自身は、挨拶や会釈ができていないと認識している割合が高いが、来校者には十分に伝わっていないことが多い。 ・挨拶は、人と人をつなぐ大切な行為であり、他者を尊重し、良好なコミュニケーションを築くために不可欠であることを、今後も継続して指導していきたい。 ・ホームルームや学年集会などを通じて、繰り返し指導を行っていく。

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
3	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	【判定】B 97.2%	・今年度も、挨拶指導やさまざまな啓発活動を通じて、他者を尊重し、良好なコミュニケーションを築くことの重要性を伝えてきた。 ・他者の言動を尊重し、認め合う態度を育む指導を今後も継続していきたい。
	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立（文武両道・文武不岐）をめざす。	県予選を通過しブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	【判定】B 18の部	・運動部、文化部ともに各種大会・発表会で練習の成果を発揮した。県総体では総合6位（男子7位、女子11位）であった。 ・女子の運動部加入率が低下傾向である。加入に向けて手立てを考えたい。
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。ゴミの分別や節水・節電に取り組む。	校内の環境保全活動に努めていると答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】A 93.5%	・学校評価アンケートの結果、93.5%（「あてはまる」57.8%・「ややあてはまる」35.7%）の回答を得た。しかし、現状ではごみの分別の徹底に課題が見受けられる。 ・学校から出るごみは事業系ごみとして処理されるため、家庭ごみとは分別の方法が異なる。その点を掲示物などで周知し、生徒が正しく分別できるよう指導を徹底していきたい。
	⑥ 読書推進活動と学習環境整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などにより、貸し出し冊数や入館者数の増加をはかる。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 3,500冊以上 B 3,000冊以上 C 2,500冊以上 D 2,500冊未満	【判定】A 3,558冊	・今年度の図書貸出冊数は、前年度と比べて増加した。コロナ禍もようやく収束を迎え、関係各位の配慮により、大型空気清浄機（Airdog）2台が稼働することで、学習環境のさらなる改善に努めることができた。その結果として、閲覧室の座席に余裕を持たせ、快適な学習空間の提供を図った。 ・1年生の図書オリエンテーションでの貸出を皮切りに、各学年の個人貸出も概ね順調であった。しかし、生徒が各自所有する端末（Chromebook）を活用することで、調べ学習のための貸出は減少し、それに伴って貸出冊数の減少が避けられない状況となっている。 ・上記の現状を踏まえ、次年度においても適切な具体策を講じながら、さらに魅力と特色のある図書館づくりに努めていきたい。
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。	相談室を利用した生徒へのアンケート「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】B 83.3%	・12月末までに相談室を利用した生徒は、延べ156名であった。相談室利用者を対象としたアンケートでは、42名が「利用したことがある」と回答し、そのうち「気軽に相談でき、利用しやすい」と感じた生徒（「よくあてはまる」+「ややあてはまる」）は35名で、割合は83.3%であった。 ・次年度も、学年・保健室・スクールカウンセラーと連携し、生徒が気軽に相談できる環境を整え、より利用しやすい相談室を目指していきたい。
学校関係者評価委員会の評価		生き方講演会は、保護者に対しても聴講できるようにすればどうか。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		会場の大きさに制限があるため、保護者に対しては入場制限をした。入場できなかった保護者に対しては、一定期間にアーカイブ配信を行った。今後も、様々な工夫をしていきたい。		

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
4 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。 ・授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。とりわけ、探究活動を通して様々な社会課題解決に向け思考し、定量的・定性的根拠をもって提案する力を育成する。	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりをめざす。	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校合計数が、 A 1,500名以上 B 1,200人以上 C 900人以上 D 900人未満	【判定】B 1,460人	・各行事の参加人数は「PTA総会」821人、「いしかわ教育ウィーク」627人、「生き方講演会」12人（保護者来校に制限を設けた）であった。「生き方講演会」は後日に動画配信を行い、再生回数は600回を超え、保護者の関心の高さをうかがうことができた。 ・保護者が来校しやすく、学校をより理解していただけるような行事運営を心掛けたい。
	② 理数科1,2年生、普通科1,2年生及び、科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実させることで、科学教育を推進する。	「理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム、サイエンスフェスタ等SSHのプログラムに参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答するプログラムの参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】C 78.7%	・回答数47中、「大変良かった」37、「良かった」10であった。設定上C評価であるが、「あまり良くなかった」「良くなかった」の回答は0である。 ・イベント内容が少し難しく高度であったことや小学生も多く参加していたこともあって、「大変良かった」が少し足りなかった ・次年度はもう少し余裕をもった企画運営を生徒に担わせたい。
	③ 「学年だより」、「進路だより」「学校HP」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。	「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】B 85.1%	・「進路だより」または「学年だより」を各学年とも10回程度発行し、学年としての情報を発信した。 ・「学年だより」「進路だより」「学校HP」を「見ていない」「わからない」と回答している割合が1割程度あり、今後の課題である。また、「学校HP」においては工夫の余地が残されている。 ・引き続き、学校の様子を伝えることでご理解やご支援を賜りたい。
学校関係者評価委員会の評価		相談室の利用者は多岐にわたる。今後もきめ細かな対応を望む。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		スクールカウンセラーともしっかり連携して、今後も生徒の悩みに対応していく。		
5 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。 ・効率的で密度の高い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。	① 業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進める。これにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。	ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【判定】C 70.1%	・部活動休養日や夏季休業中の学校閉庁日の設定、年休の積極的な取得などによるライフワークバランスへの意識の向上には、一定の成果がみられる。 ・しかし、時間外勤務時間の個人差が大きく、業務の偏りを改善して平準化することが求められている。 ・また、ICT活用の推進、会議や研修の合理化など、業務効率化に向けた改善が求められており、持続可能な勤務環境の整備を考えていく必要がある。
学校関係者評価委員会の評価		ICTを活用するなどして、できるだけ時間外勤務時間を減らすように努力してほしい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		例えば定期試験の採点業務において、多くの教員が「採点ソフト」を活用することで採点が効率化している。しかし繁忙期など時間外勤務時間が多くなる傾向も依然としてある。今後もどんな改善ができるか検討していく。		